



## 一 キノコ人間

俺は森林公園の池の周囲をジョギングしていた。林を抜け、広場に走り出ると、芝生一面にキノコが生えていた。赤や黄色など、色とりどりのキノコ。もちろん、毒キノコだ。俺は食べるつもりはなかったが、あまりの色鮮やかさに、つい一本を引き抜き、ランニングパンツのポケットに押し込んだ。

その夜、持って帰ったキノコをグラスに入れ、枕元に置いて眠った。しばらくすると、腕がかゆくなった。俺は枕元の電気を点けた。驚いた。二の腕からキノコが生えているではないか。俺はベッドから飛び起き鏡の前に立った。キノコが生えているのは腕だけじゃない。頭、顔、足などにも生えている。それだけじゃない。シャツやズボンも膨れ上がっている。俺は、下着を脱いだ。予想どおり、胸にも腹にも、局部にも、キノコが生えていた。全身キノコだらけだ。特に、頭のとっぺんに生えているキノコは、恐怖と言うよりもお笑いだ。ヘアースタイルが、キノコちゃんまげとは。

俺は必死になって、体中のキノコをもぎ取った。痛みはない。どちらかと言えば、かゆみだ。全身がかゆい。折角、キノコをもぎ取ったにも関わらず、その跡から、再び、キノコが生えてくる。見る見るうちに、生えてくる。まるで、映像を早送りしているようだ。そんな、馬鹿な。俺は、恐怖のあまり大声を上げた。そして、現実の世界で目覚めた。体中が汗でびしょりだ。

俺は、ベッドから起きあがると、冷蔵庫から麦茶を取り出し、一気に飲み干した。異常に喉が渴いていた。体中の水分が全て吸い取られた気分だ。悪い夢を洗い流すため、洗面台に向かう。鏡の前に立った。鏡の中の俺の右頬にキノコが生えていた。冗談だろう？驚いて、そのまま引きちぎり、凝視する。確かに、キノコだ。俺はそのキノコを手を持ったまま、ベッドに向かった。ベッドの傍らに置いたグラスの中にキノコがある。二つを比べる。同じキノコだ。

「クソッ。こんなものを置いておくからだ」

俺は二つのキノコを燃やせるゴミ袋の中に叩き込んだ。明日は、燃やせるゴミの日だ。朝一番に、さっさと生ごみと一緒に捨ててしまおう。もう一度、鏡を見た。キノコが除けた跡は、血ではなく、白い粉が吹いていた。まさか、孢子か。俺は、特にキノコが生えていた所を中心に、神経質なくらい、丁寧に何回も何回も顔を洗った。

その日は、会社を休んだ。もし、顔からキノコが生えてきたらどうしようかと、心配だったからだ。キノコが生えていた右頬には、どうなる訳でもないけれど、絆創膏を貼った。外に出る勇気がなかったので、その日は一日中、家の中に閉じこもっていた。気分転換とトレーニングを兼ねて、街中をジョギングでもすればいいのだが、とてもそんな気分にはならなかった。ひよっと、道路にキノコが生えているのを見つけたら、それこそショックだ。

夜になった。ゆっくりと顔の絆創膏をはがす。大丈夫だ。何も生えていない。夢だ。悪い夢だったんだ。当たり前だ。体からキノコが生えるわけがない。俺は、キノコの原木じゃない。俺は、全身をシャワーで洗い流して、キノコのことなんか忘れるために、ビールを飲んだ、何かをも洗い流すために。安心したのか、いつもよりも缶ビールの本数が増えた。眠い。俺は、早々にベッドについた。

その日の晩だ。俺は寝がえりを打った。その時、体に違和感があった。ふとんを跳ね除け、蛍光灯を点け、鏡の前に立った。鏡の中の俺は、体中にキノコが生えていた。もちろん、鏡の中の俺だけではない。本物の俺に、キノコが生えているのだ。それも、昨日のように右頬だけじゃない。頭、顔、足にも生えている。おまけに、シャツやズボンも膨れ上がっている。俺は、下着を脱いだ。予想どおり、胸にも腹にも、局部にも、キノコが生えていた。全身キノコだらけだ。特に、頭のとっぺんに生えているキノコは、恐怖と言うよりもお笑いだ。ヘアースタイルが、キノコちゃんまげとは。

この有様は、昨晚、夢で見たのと同じだ。俺が夢の中で感じた光景だ。いや、夢と思い込んだ風景だ。正夢だったのだ。事実だったのだ。未来予想図が見事当たった。俺は、等身大の鏡の前に立つ。体全体にキノコが生えていることを、俺がキノコ人間であることをようやく認識した。

## 二 見知らぬ来訪者たち

その時、いきなり玄関のドアが開き、数人の男たちがどどっと入って来た。男たちは、俺を見るなり、「おっ、収穫時期だな」とニヤリと笑い、俺をはがい締めになると、口に布のガムテープを張り、両手首と両足を紐で縛り、担ぎあげると、そのまま部屋から連れだし、停車中の車の後部座席に押し込んだ。俺は縛られた両手両足を使って逃げようとしたが、「全身にキノコが生えた体で、どこへ行くつもりだ。もう、お前には居場所はないぞ」と低く、ドスの効いた声で諭されると、抵抗する力を失った。

車は、俺がジョギングをしている森林公園にやってきた。座席の横の男が「さあ、降りろ」と俺の体を蹴る。「こら、商品だぞ。手荒な真似はよせ」と運転手の横の男が叱ると、「すみません。兄貴」と答えた。俺は、今、自分の置かれている状況がよくわからなかった。ただ、ただ、全身にキノコが生えているのと同じ一連の悪夢だと、思い込もうとした。

俺が連れて来られたのは、公園の中の食堂兼土産物屋だった。俺は、両脇を男たちに抱えられて、店の中に入った。そこには、店主がいた。顔なじみだ。ジョギングの後に、ジュースを購入するために、何回か店に入ったことがある。「いらっしやい」店主は親しげに話し掛けてきた。「さあ、あなたは、今日から、ここで働いてもらいますよ。いえいえ、何もする必要はありません。ただ、じっと、この檻の中でいてくれたらいいですよ。さあ、お前たち、檻の中に放り込め」店主は男たちに命令した。店の真ん中には、人が一人くらい入れる檻があった。今までに、店の中に何回か入ったことがあるが、こんな檻なんか今まで見たことがなかった。急ぎよ、置かれた檻なのか。

俺は、無理やり、檻の中に押し込められた。「さあ、お仕事ですよ」店主は、俺の目の前に立ち、「さあ、腕を出してください」と言う。俺は、仕方なく、腕を出した。店主が俺のシャツの腕をまくと、なんと、そこには、キノコが生えていた。やはり、夢じゃない。

「じゃあ、いただくよ」店主はいきなり、俺のキノコ（もちろん、俺は俺のキノコを所有したいとは思っていなかった）を根元からもぎ取った。キノコは、意外なほどあっさりと、何の抵抗もなく取れた。俺の体には何の痛みもなかった。キノコをとった後には、白い跡が残っていた。

「さあ、これから料理だ」店主は、嬉々として、店の奥の厨房に入り、しばらくして、小皿に乗せて出てきた。

「キノコは、取り立てが一番、新鮮で、美味しんだよなあ」小皿にのせられたキノコ。醤油のプンとした匂いが香ばしかった。店主と男たち、つまり、従業員が、ビールで乾杯している。

「お前も喰うか」車の中で俺の横に座っていた男が、箸でキノコを掴むと、俺の目の前に突き出した。共食いだ。そんなもん食えるわけがない。俺は、昔から、何か考え事をしている時、爪を噛む癖はある。「爪を噛むのはよしなさい」と、亡き母親からいつも注意されていたが、その爪を食べる習慣はない。なおさら、自分の体ら生えたキノコなんて、食えるわけがない。

雨？髪の毛に手をやる。少し湿っている。天井を見る。そこには、シャワー栓が取り付けられていた。勢いよく水が噴き出してくる。俺は全身水浸しになった。

「よし、OK。明日になったら、キノコが取れ放題だぞ」シャワーの音の隙間から、店主の喜ん

だ声が響く。俺は、そのまま地べたに座り込んで、瞼を閉じた。

翌日、俺は、まぶしさと暑さから目が覚めた。顔に朝陽が当たっていた。昨日のことは、夢であって欲しい。その願望を確認するために、ゆっくりと瞼を開けた。だめだ。夢じゃない。俺の瞳からは、しまうまの風景が見えた。俺は、やっぱり、檻の中にいた。

店の中は、誰もいなかった。ひんやりとした空気が肺の中に流れ込む。昨日のシャワーの味だ。夜シャンもなかなか乙なものだ。待てよ。シャワーの味が乙だと？以前は、そんなことは感じなかったはずだ。天井を見ると、でがらしのお茶のように、シャワーの口から、水滴がひとしずく落ちてきた。俺の顔に当たる。美味しい。水分がこんなに愛おしいとは、これまで感じたことがなかった。心境の変化か、体調の変化か。

むむむ。俺の体が膨れ上がっている。Yシャツやズボンが膨らんでいる。一日で、体が急に太るはずがない。まして、昨日は、あまりのショックのため、何も喰っていない。想定内の事実を確認しなければならない。

俺は、Yシャツのボタンをはずした。奇妙にも、偶然にも、それとも面白がってか、俺の両乳首からキノコが突き出て、傘を開いている。新たな水着のデザインに活用できる。おへそからもキノコが突き出ていた。これで、雷様からおへそを守れる。その他にも、両肩からも一つずつ生えている。なで肩から怒り肩になった。これで、どんな人ゴミの中でも風を切って歩ける。よくよく考えてみると、体中からキノコが生えるのも、そう悪いことではない。人間、万事塞翁が馬だ。なんとかなる、と自分を慰める。

ズボンのウエスト部分を引っ張り、上から下を覗く。案の丈だ。あそこからは、別の突起物が生えて、隠してくれている。これで、パンツを脱いでも恥ずかしくない。両膝からもキノコが、アキレス腱にも、両足の指の先にも生えている。なんだか、キノコファッションを身に付けたモデルのようなだ。かぼちゃを好んで作品にするアーティストもいる。キノコ姿のモデルがいてもいいじゃないか。

俺は、シャツもズボンも脱いで、狭い檻の中で、モンローウォークのかっこうをした。音楽が鳴り、ピンスポットが当たれば、俺はファッションモデルだ。一流雑誌の表紙を飾る日も間近だ。

「機嫌がいいじゃないか」その声で、俺は我に返った。カウンターに、店主とその仲間たちが立っていた。「さすが、スポーツマン。現実への対応能力が高いな」これは、誉められたのか、貶されたのか。「歌って踊れて、キノコも提供できる、スーパースターだな」

「えへへ」俺は頭を搔いた。頭にもキノコが生えていた。これで、手を使わないでも雨降りの中を歩ける。特に、最近、都市化が進んで来たせいなのか、地球温暖化のせいなのか、突然、晴間を切り裂くようにゲリラ雨が襲って来る。そんな時、街ゆく人は傘を持っていない。雨から逃れるため逃げ惑う人々。傘を求めて、近くのコンビニやスーパーなどに飛び込む。

店舗では、倉庫の奥の片隅にあったほこりを被ったビニール傘を取り出し、一本百円の値札を急いで五百円に書き直し、店頭に並べる。良心的な店舗では、四百九十円という破格値で売り出すときもある。

人々は、値段は後回しにして、我先にと、傘の柄を掴み、混雑する人を押し退けてレジへと向

かう。中には、傘を持ったまま、金も払わずに、どしゃぶりの雨の中に駆けだす者もいる。店員は、「こら、待て」と叫び、不届きな者を追いかけてやろうとするが、レジの前の行列を一瞥すると、立ち止る。

今は、この客たちに、傘を売ることが、自分の最大限の任務であることを自覚する。店舗のオーナーは、傘をささずに雨の中を逃げ去っていく万引き人の背中を見て、チクショーと思いながらも、だからこそ、非常時に、通常よりも割高な値段（傘を万引きされる保険代を含んでいる。）で傘を販売することを正当化するのであった。

もし、自分の頭の上に、キノコだろうが、爆発した髪の毛だろうが、体を覆う物があれば、高い傘を買わなくても、万引きという犯罪行為をしなくてもいい。すばらしいことだ。俺は、一人、にんまりとした。

店主たちは、俺の顔を見て、とうとう発狂したのかと思ったようであったが、俺が正常であろうが、異常であろうが、俺の体から、キノコが生えれば、それでいいと納得しているようであった。

### 三 キノコバーベキュー

---

「さあ、朝の出荷だ」店主と店員は、檻の四方から囲むと、俺の体から次々とキノコをもいでいった。俺は、元のやせっぽちの体になった。腹が減った。とてつもなく腹が減った。

「ほら、ごちそうだ」店員の一人が、シャワーの栓を緩めた。天井から水がしたり落ちてくる。ちょうどその時、東の窓から朝陽が差し込み、檻に虹がかかった。俺は、目に絶景を堪能しながら、朝シャンと水の朝ご飯を得ることができた。これこそ、一滴で、三度美味しい体験だ。

俺の体は、キノコをもがれて、肌も露わな状態であったが、水がかかると、すぐに、頭からも、脇からも、乳首からも、あそこからも、キノコが生えてきた。キノコが服となった。俺は、そのまま、床に座り込んで、うとうととし始めた。

「ほら、起きろ。仕事だ」次に目が覚めたのは、時計の針が十一時半を指していた。今から、キノコ定食を食べに、お客さんが来るんだ。しっかりと働いてもらわないとな」

店主が上から目線で、俺に指示を出した。俺はのそのそと立ち上がる。

「きゃあー、すごい。けど、気持ち悪い」俺の前には、二十代の女たちが立っていた。店主は、「人間キノコです。どうぞ、新鮮なキノコをご自身で選んで、バーベキューで、召し上がってください」

女たちは、おそろおそろ、俺の体からキノコをもぎ取ると、近くの網の上に乗せ、俺の一部を焼き始めた。

「キャー、気持ち悪いけど、新鮮で美味しい」一体、どっちだ。俺は、苦虫をかみつぶしながらも、誉められると嬉しかった。一体、どっちだ。どっちでもよい。その日は、何十人ものお客が、俺の体からキノコを採取した。いくら俺の体からキノコが取り放題といっても、こんなにお客が来れば、生産が間に合わない。俺の体は元のストリップ状態に近づいた。

その日は、夜の営業は取り止め、夕方に店舗が閉められた。キノコの在庫が不足したからだ。店主と従業員たちが、店の隅っこで、俺に聞えないように、何か密談している。話が終わると、俺に、「仲間を見つけて来てやるからな」と言い残し、全員が店から消えた。

俺は、夜も仕事をしなくていいから、ほっとした。だが、俺の仕事といっても、ただ単に立っているだけで、キノコは、俺の生理現象のように、次々と生えてくるので、何の苦労もなかった。

しばらくすると、店主たちが戻って来た。公園を散歩していた、おばさんやおじいさん、中には、小さな子どもをいた。それぞれの人々を容赦なく、檻の中に入れると、シャワーで、水を掛けた。拉致された人々は、あきらめたのか、檻の中でうずくまっていた。互いに目線を交わそうとしない。もちろん、俺の顔中にも、キノコが生えていたので。俺の目玉は、外から見えない。

翌日になると、朝の早い時間から行列が出来た。目の前で、新鮮なキノコが狩れて、バーベキューで食べられるという口コミが伝わり、キノコが沸くように人がわんさか集まって来たのだ。

店主や従業員たちはにんまりとしていた。この日に備えて、昨日、人間狩りをしておいて、よかったという安堵感からだ。何事も先手必勝だ。誰だって、自分が思うとおりになれば、嬉しいこ

とはない。

今日から、俺たち、そう複数形になった、キノコ人間たちは、朝からシャワーを浴び、客のために、キノコを生え続けた。俺は、こんな仕事も悪くはないなと思い始めた。客からは、美味しい、新鮮だ、と誉められ、仕事と言ってもただ立っているだけで、一日何回も、食事とシャワーが兼用の水も与えられるからだ。

客からは、キノコ人間によって、採れたキノコのやわらかさ、堅さ、甘味や苦みなど、少しずつ味が違うと言われた。その中で、一番人気は俺、俺のキノコだった。

店の中央には、人気ランキング表が張り出され、俺の名前の棒グラフが、他の奴に比べて、断然と高かった。人は、当然のごとく、人気ランキングの上位を選ぶ。だから、より一層、人気ランキングが上位となる。人気は人気を呼ぶことになる。

その頃には、この店も、昔の、小さな店から、ビアガーデン並みの巨大な店舗に増築していた。他の場所にも支店を作ろうか、それよりも、チェーン店化して、ノウハウだけを売った方が儲けになるかと、店主たちが激論を交わしていた。

今や、店主は、社長となり、当初の、俺を拉致した社員は、それぞれ、副社長や専務になっていた。社長は、画期的なビジネスの成功者として、テレビや新聞、雑誌などマスコミの取材を受け、一躍、注目を浴びることになった。ただし、俺と同じようなキノコ人間たちは、俺を含め六人だけであった。



## 四 小人の来訪

ある日のことだった。外は、暴風雨が吹き荒れ、ときたま、窓ガラスから稲妻が光るのが見えた。台風が来ているようであった。「今日は、客も来ないだろう。早めに、店を閉めよう。夕方には、取材を受けなきゃならんからな」

「そうですね。店を早く閉めましょう」

店主と従業員、いや、今は、社長と副社長の声が聞え、店の電気は消され、鍵が閉められた。俺たち、キノコ人間たちは、ただ黙って、嵐が過ぎ去るのを待つしかなかった。

そんな時、トントントン、トントントン、と誰かがドアを叩く音がする。小さな音なので、他のキノコ人間たちには聞こえなかったのか、もう眠りに着いてしまったのか、誰も反応しない。でも、ドアに一番近い俺には幽かだが聞えた。

「誰もいないのか。助けてくれ」確かに聞こえた。それも、人間の声だ。最近、この公園でも、猿や猪、アライグマが出現するそう。俺は、一瞬そう思ったが、違っていた。

「仕方がない。黙って入ろう」泥棒か。この商売が繁盛しているのを聞いて、盗みに入ろうとしているのかもしれない。だが、抜け目容赦ないオーナーは、この店を警察や郵便配達人の立寄り所にしたり、警備会社と契約して、二十四時間の警備を行っている。一日の売り上げ金は、必ず、金融機関が収集に来ているのでこの店に一文の金もない。唯一の財産と言え、金が成る木ではなく、キノコが生える俺たちだ。まさか、俺たちを盗む泥棒なのか。

だが、俺の目の前に現れたのは、目の下に現れた人間だった。そう、俺よりもはるかに小さな人間。小人だった。小人と言っても、赤ちゃんや幼児じゃない。白い髭を生やし、頭には赤い頭巾をかぶり、木こりの服装だった。以前、どこかで見たことがある。そう。白雪姫に登場する七人の小人の小人だ。童話が現実になったのか。いや、俺がキノコ人間になるぐらいだ。現実が童話になったのだ。

「おい、わしをそんなに見下げるな」小人が下から俺を見上げながら叫んだ。俺は、相手を見下したり、見下げているわけではなかった。ただ単に、俺の方が数倍、いや、数十倍、物理的に身長が高いだけだ。そして、俺は、それを望んでいるわけではなかった。

俺は、相手の目の高さに少しでも合わせようと、しゃがみこんだ。

「よし、これなら対等だ」小人は胸を張って答える。それでも、俺の目の高さの方が数倍高い。

「それで、頼みがあるんじゃ」小人は急に下から物を言いはじめた。

「俺に何か」

「あんたの体のキノコを一つ分けて欲しいんじゃ」

それなら、そうと早く言え。最初は強気に出て、こちらが下手に出ると、自分の願いを押しとおそうとする。よくあるパターンだ。

「腹が減っているんですか」

「いくら腹が減っても、人間の体から生えているキノコなんか喰えるわけがないだろう。気持ち悪い」

俺は腹が立った。いくら、何でもそれは言い過ぎだろう。だが、小人相手に喧嘩をしても仕方が

ない。

「そりゃ、そうですね。でも、この店には人間のキノコを目当てに、多くの方が訪れていますよ」

「そりゃあ、真実を知らないからだ。真実が見えないからだ」

「ああ、そうですか」

俺は、反発しながらも、この小人のじいさんともう少し話そうとした。

「それじゃあ、何に使うんですか」

「傘じゃ、傘」

「傘ですか？」

「あんたはこの建物の中にいるからわからんだろうが、今、外は大雨じゃ。花の蜜や木の実など、喰い物を探しに森に出掛けていたら、急に雨に降られてな。それで、困って、雨宿りを兼ねて、この建物に入ったら、全身キノコだらけ、わしから言えば、全身天然の傘を身につけているあんたたちがいたわけだ。そんなに、キノコ、いや傘を持っているんだから、一個くらい、貸してくれてもいいだろう。もちろん、くれとは言わない。ちゃんと、お礼をつけて、返しに来るよ」

俺は、心の底から、困っている小人を助けたいと思った。ついでに、俺もこの状況から助けて欲しかった。だが、それを口に出すと壊れてしまいそうで、唾を飲み込み、別の言葉を発した。

「じゃあ、これをあげるよ」

俺は、頭の上に生えている一本を取ると、小人のじいさんに渡した。

「サ、サ、サンキュー」

小人は、どもりながらサを三回繰り返し、お礼を言うと、俺のキノコの柄を肩に掛け、くるっと一回転した。

「どう？」

どうもこうも、クソもない。いや、いかん、クソは下品だ。小人は、まるで、ファッションモデルのようだ。だが、俺のキノコで、相手が気分をよくしているわけだ。俺も気分が悪いわけがない。

「いいよ。似会っているよ」

「そう。そりゃあ、ありがとう」

小人のじいさんは、キノコ傘をくるくる回しながら、扉の方に消えていった。あいつ、一体、どこからこの建物に入って来たのだろう。まあ、いいか。俺は眠りについた。

## 五 折檻

---

翌朝だ。俺は太陽の光の眩しさじゃなく、頭を殴られ、目から出た火花のおかげで目が覚めた。

「こら、俺たちのキノコをどこへやった」

俺の檻の周りに、社長を始め、副社長、専務たちがいた。今では、俺たち、キノコ人間は、誘拐魔たちに敬意を込めて、役職で呼ぶよう指導されている。

「キノコって？」

「とぼけるな。頭のキノコだ。昨日まで生えていたはずだ。貴様、まさか、共食いでもしたのか？」専務が俺の顎を掴んで、首を絞める。

「し、し、知りません」首を絞められたら、知っていても吐けないじゃないか。

「嘘をつけ。まさか、どこかの業者に横流ししたんじゃないだろうな」

今度は、副社長が、俺の頭を、ちょうどキノコが抜けたところを叩いた。

「痛い」俺の頭は、今は、河童の皿のようになってたので、ゲンコツの響きが直接脳ミソに届いた。

「まあ、手荒なまねはよしな」社長の出番だ。よくある、何とか組の光景だ。最初は、子分が手荒くして、後から親分がやさしくする。これで、たいていの奴は、白状してしまう。

「俺はなあ、あんたのことを心配しているんだ。この子分どもは、手荒な奴が多くて困っているんだ。許してやってくれ」

そらきた。俺の予想どおりだ。だが、俺は小人のことなんか、決してしゃべらないぞ。

「し、知らないんです。朝、起きたら、頭になかったんです」

「嘘をつくな」再び、副社長のパンチが俺の頭を殴り、その痛みが電光石火の早さで俺の頭の中から足の指さきまで貫いた。再び、目から火花が飛び出た。

「ほ、ほんとう、です。な、何も知りません」

社長が、俺の顎を握って、「今回だけは許してやる。今後、お前の体に生えているキノコ、つまり俺の財産を一本で失ったら、ただじゃおかないからな」

社長は立ち上がると、店舗全体に聞えるように、

「いいか。お前たち全員も、だ。キノコを一本でも失えば、体のどこかが一本無くなるぞ」

ほんとに、どこかの暴力系映画のワンシーンみたいだ。俳優にしては上手い。もちろん、俺は役者じゃない。本当に、体中にキノコが生え、檻に収監されている。なんてこった。

その日も、次々と客が訪れ、俺を始め、キノコ人間たちのキノコがむしり取られ、閉店の頃には、丸裸状態になった。俺たちは、明日に備えて、シャワーを浴びせられた。こんなに日が永遠に続くのかと思うと気が狂いそうだったが、立ちっぱなしの仕事なので精神の疲れより肉体の疲れが優先し、俺は膝を抱えたまま眠ってしまっていた。

## 六 脱出

---

「おい、起きろ」誰かが俺の頭を揺すっている。俺は目覚めた。目の前に、小人のじいさんがいた。手には、俺のキノコを持っていた。

「約束通り、キノコ傘を返しに来たぞ」

キノコは、数日たったせいか、少ししなびていた。こんなキノコを見つけられたら、それこそ、再び、殴る蹴るの暴行を受けてしまう。

「あ、ありがとう。だが、もういいんだ。それは持って帰ってくれ」

「そういう訳にはいかない。俺も小人だ。小人に二言はない。借りたら返すのが、俺たち小人の法律だ。さあ、返したぞ」

小人のじいさんは、俺の頭にしなびたキノコを突き刺した。キノコは、俺の血や体液を吸い取ったのか、見る見るうちに、色つやが戻った。

「さあ、約束を果たしたぞ。わしは帰る」

「ちょっと待ってくれ。小人のじいさん、いや、あなたに頼みがある」

「小人は余計だが、あんたには世話になった。一つぐらい頼みは聞いてやるぞ」

「俺をこの檻から逃がしてくれ」

俺は、正坐して、手を合わせ、頭を垂れた。さっき植えられたばかりのキノコも同様に頭を垂れている。

「いいとも」俺の誠意が伝わったのか、小人はあっさりと承諾してくれた。

「だが、そんな大男じゃ、この檻から抜けられない。わしのように、小人になってもいいか？ 一生、小人のままだぞ」

究極の選択だ。このまま、キノコ人間として一生を終えるのか、はてまた、このじいさんのように、小人になって、この檻から抜け出して一生を暮らすのか。俺は決めた。小人になる。現状維持では駄目だ。現状打破こそ、俺の生き方だ。俺は、じいさんに頼んだ。

「よし、わかった」

じいさんは、柱をよじ登るとシャワーの栓を緩めた。シャワーは、キノコの傘の部分にだけ当たった。キノコはどんどんと大きくなる。反対に、俺の体はどんどんと小さくなった。とてもじゃないけれど、頭のキノコが重すぎて支えられない。キノコに押しつぶされそうだ。

「今だ。頭のキノコを取れ」俺の体がじいさんと同じくらいの大きさになった時、じいさんが叫んだ。俺はありったけの力を振り絞り、頭からキノコを外すと、キノコの傘にはさまれないように飛び出た。キノコは、だるま落としのだるまのように、体の俺がいなくなっても地面に真っすぐに屹立した。

「うまくやったな」じいさんは地面に降りて来て、地面に座り込んでいる俺の手を引っ張ってくれた。俺は体が小さくなっているため、たやすく檻から抜け出ることが出来た。

「さあ、早く逃げないと、大変なことになってしまうぞ」

「どうことだ」俺はじいさんの背中に話し掛けた。

「今にわかる」

「もう一つのお願いだ。俺と同じように檻に入れられているキノコ人間たちも助けてやってくれ」

「時間がない」

「願いだ」

俺の必死の思いが伝わったのか、じいさんは、俺と同じように、キノコ人間の、頭のキノコだけを成長させ、反対に、体は収縮させ、檻から抜けださせた。もちろん、俺もじいさんの指導の下、手伝った。檻の中のキノコたちは等身大にまで成長し、地面にすくっと立っている。

今、この店舗にいるのは、小人のじいさんと、俺ほか六人の元キノコ人間で、今は小人の、計七人だった。

「さあ、行くぞ。ぐずぐずしてられない。その前に、何か隠す物があるな」

じいさんは、俺たちの体中から落ちたキノコを拾った。俺たちの体が小さくなったので、キノコは小人の等身大の大きさだった。

「さあ、みんな、一人一本ずつ持て」

「外は、雨でも降っているのか」

俺はじいさんに尋ねた。じいさんが、ニヤッと笑った口の中は、ヤニもなく、白い歯だった。

「外に出たらわかる」

じいさんがキノコを持って外に出る。俺たちも、それぞれキノコを持って、じいさんに続く。何しろ、キノコは俺たちの等身大の大きさだ。いくら繊維質だからといっても、かさばるし、小人になった俺たちには重い。不平を言うもののいた。特に、ばあさん小人だ。

「ぶつぶつ、言うな。命がかかっているんだぞ。元のキノコ人間に戻りたいのか」

じいさんの声に俺たちは黙った。

「来たぞ。道を避けて、草むらに隠れ、キノコ傘で自分を隠すんだ」

じいさんが叫んだ。俺たちは、何のことかわからないまま、じいさんの言う通りにした。何か音がする。一つや二つではない。何かが行進する音だ。それも、俺たちの方に向かってくる。

「いいか、何もしゃべるんじゃないぞ。音も立てるな」じいさんの口調は厳しかった。草の茂みとキノコ傘の隙間から何かが見えた。キノコだ。キノコが行列をなしている。それも、十や二

十じゃない。百、いや、二百、いや、数えられないほどの大群をなしている。足があるのか、ないかわからないが、滑るようにして、前に進んでいる。俺たちは、思わず驚きの声を上げようとしたが、「しっ」というじいちゃんの声に機先を制され、押し黙った。

キノコの大群たちは、俺たちに気がついたのか、気付いていないのか、わからないが、次々と俺たちの前を通り過ぎた。キノコたちの行き先は、俺たちの店、キノコ店だった。

キノコの大群が通り過ぎて、しばらくの時間が立った。その間、俺たちは、蚊に血を吸われようが、アリに足を踏まれようが、身動き一つせず、じっとしたままだった。

「さあ、行くか」じいちゃんがゆっくりと歩き出した。手にはキノコ傘は持っていない。

そのことを尋ねると「もう大丈夫だろう」

俺たちは、じいちゃんを先頭にして、歩き出した。

「あいつら、キノコたちは、何をする気ですかね」

「さあ、わからんなあ。ただ、察しはつくけどなあ」

じいさんは、キノコ店の方を振り返りながら、呟いた。

「さあ、行くぞ。お姫様がお待ちかねだ」

「お姫様？」

「そう、お姫様だ」

踵を返し、早足で歩くじいさん。俺たちはじいさんに急いでついていった。

## 七 人間キノコ

---

それからというものの、俺たちは小人のまま（もちろん、前の大きさと比較してのことだが）生活を始めた。それぞれが、小人王国で、役割を持った。王国と言っても、お姫様とじいちゃんたち七人の小人だけだ。俺はじいちゃんと一緒に、持ち前の脚力とこの公園に詳しいということで、食糧調達班に任命され、どんぐりなどの木の実やあじさいの花の蜜などを集めた。以前にもまして、健康的な生活だ。

ある日、久しぶりに、キノコの店の近くを通りかかった。小人になって逃げ出してから、初めてのことだった。

「のぞいてみませんか」

俺の前を歩くじいさんを誘った。

「そうだな。見てみるか」

俺たち二人は、草むらに隠れながら、裏口の戸に回った。ちょうど、俺たちの体の大ききの穴が空いていた。

「俺がこの前、お前たちを助けに来た時に開けたんだ」じいさんは胸を張って答えた。

中に入ると、驚いた。俺たちの頭に生えていたキノコは、天井に届くまで成長していた。まるで、この建物の大黒キノコだ。その数、ちょうど六本。そして、その周りを、俺の数倍の、人間大のキノコたちが、忙しそうに料理を作ったり、テーブルに座って、バーベキューをしていた。隠れている俺たちの前を横切ったキノコたちも成長していた。

座っていたキノコが立ち上がり、檻を突き破った巨大なキノコの周りに立ち、手を伸ばし何かをもぎ取ろうとしている。俺は、その何かを確認した。巨大なキノコからは、俺を拉致した店主や店員たちが、小人の大ききで生えていた。

客らしきキノコは、店主をつまみ取ると、籠の中に入れ、テーブルの上の網の上に乗せた。店主は、火に焙られて、ウギャアと叫び声を上げると、くるくるっと胎児のようにちじこまった。キノコは、箸で店主キノコを掴み、焼き具合を確認すると、醤油につけ、ポイと口の中に入れた。

「美味しい。新鮮だ。やめられないな」

キノコの満足そうな声。俺とじいさんは、互いに顔を見合わせ、無言のまま、その場から逃げるように立ち去った。